

水稲苗の生育状況と田植時の注意事項

1. 水稲苗の生育状況

本年は播種時より不安定な天候が続き、初期管理には苦慮されたことと存じます。現在のところ生育はやや遅れ気味ですが、目立った病害の発生もなく概ね順調となっております。今後、天候の回復により高温日が多いと徒長による軟弱苗やムレ苗が心配されます。節間が長く、第2葉の長さが6cm以上になっている等の徒長傾向にある場合は、日中ハウスの前後も開放するなど換気を心がけてください。

2. イネミギワバエ(イネヒメハモグリバエ)

県病害虫防除所の発生予察では、3月下旬～4月中旬の気温がほぼ平年並みで経過したため、越冬世代成虫による産卵は代かき作業中である5月上旬と見込まれております。また、本年の発生量は平年並み～少なめと推測され(同防除所)、村内の田植時期(5月中旬～)とは発生が重ならないことから、イネミギワバエによる食害の可能性は極めて低いものと思われまます。

3. 田植時の注意事項

①品種毎の植付株数及び植付本数については、下の表を参考にしながら田植作業にあたってください。

品 種 名	植付株数(坪当り)	植付本数(株当り)
あきたこまち、たつこもち	60～70株	4～5本
ゆめおぼこ、萌えみのり きぬのはだ、ときめきもち	60株	3～5本

②強風あるいは低温の日は代枯れによる生育停滞が懸念されるため、田植えをなるべく控える。

※軟弱苗及び老化苗等でやむを得ず低温日に田植えをする場合：

グリーンナー50倍液を1箱当り100cc程度、田植当日か前日に噴霧状で葉面に散布して植え付ける。

・グリーンナー50倍液(水10ℓに対し、グリーンナー200ml)
水200ℓにグリーンナー2缶(4ℓ)……………2,000箱分

③田植後、強風日が続く場合は、深水管理を心がける。

④**籾枯細菌病に感染している苗は、本田に植えずに苗の段階で処分する。**

⑤苗立枯病に感染していても症状の軽い苗は早目に本田に植え付ける。

⑥毎年、補植苗を長く置いた圃場ほど葉いもち病の発生が早く、多い傾向にあるので、**補植苗は補植が終了次第速やかに処分する。**

4. 実生苗対策と初期除草剤(田植前処理)の使用

昨年と異なる品種を作付する場合は、実生苗の発生による異品種の混入が懸念されますので「サインヨシフロアブル」を散布し、実生発生予防に努めてください。

また、代掻きから田植までの期間が長く、初期雑草の発生量の多い圃場については、つぎの初期除草剤を使用すると効果的です。

薬剤名	成分	使用時期	対象雑草	10a当り 使用量
メテオフロアブル	1	代掻後～田植7日前まで または 田植直後～ヒエ1葉期まで	ヒエ、ホタルイ	500cc
サインヨシフロアブル				
テマカットフロアブル	2	代掻後～田植7日前まで または 田植直後～ヒエ1葉期まで	コウキヤガラ クログワイ	
クリアホープフロアブル			ヒエ、ホタルイ 表層剥離	

5. イネミズゾウムシ・イネドロオウムシ・いもち病の予防対策(播種以降)

薬剤名	使用時期	1箱当り 散布量	1袋当り 箱数	包装 単位	病害虫
フェルテラ箱粒剤	田植当日	30g	33	1kg	害虫
アドマイヤー顆粒水和剤	田植2日前～ 田植当日	100cc	500	100g	
プリンス粒剤	田植3日前～ 田植前日	30g	33	1kg	
※ オリゼメート粒剤	田植前日		333	10kg	苗いもち病
ルーチン粒剤	播種時～移植当日	30g	333	10kg	いもち病
Dr.オリゼプリンズ粒剤6	緑化期～移植当日				33
側条パダンオリゼメート 顆粒水和剤	田植時にペースト 肥料と混和使用	250g/10a	500g		
側条オリゼメートフェルテラ 顆粒水和剤					
側条オリゼメート顆粒水和				いもち病	

※ オリゼメート粒剤については、6月末頃までの効果しか得られません。

6. 弁当肥

田植え1～2日前に1箱当りN成分量で2～3gを育苗箱に散布する。

硫安(細粒)の場合……………現物量で1箱当り9～14g 1袋(20kg)で 1,400～2,200箱分

尿素(細粒)の場合……………現物量で1箱当り4～7g 1袋(20kg)で 2,800～5,000箱分

また、「苗箱まかせ」のみを基肥で使用する場合は、「LPコート30」を1箱当り現物量で50g(1袋10kgで200箱分)を田植3～5日前頃に育苗箱上に施用すると初期生育量確保につながります。

※ ハウス周辺等に除草剤を散布する際は、近隣ハウスへの飛散に十分注意してください。